日本経済新聞
1999年（平成11年）4月11日（日曜日）

可能性としての戦後以後

加藤典洋著

言説空間のゆがみを見据える

加藤典洋氏の『敗戦後論』（一九九七）は大きな論争を巻き起こした。本書は、そこに収めるはずだった「『痩（やせ）我慢の説』考」を含め、七本を集めた姉妹編である。

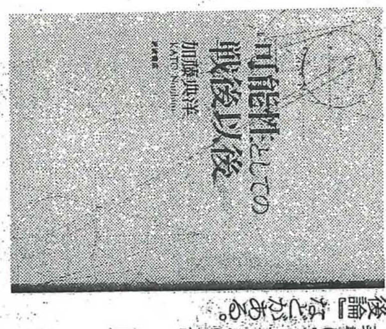
基調となるのは、戦後の言説空間のゆがみと分裂を直視し、その先に次の時代を拓こうとする意思である。例えば「失言と癋見（べしみ）」で、著者はこう指摘する。タテマエとホンネの使い分けは、日本の古い伝統と信じられているが、誤りである。新聞や辞書の用例から検証できるように、それはたかだか一九七〇年ごろから一般化した言い方にすぎない。そしてこれは、戦後日本がどのようにスタートしたかの記憶をおおい隠すための〈自己欺瞞（ぎまん）の装置〉として、無意識にうまれた。戦後の相対主義、ニヒリズムの表明なのだ。

こうした驚くべき事実は、戦後日本を考え直す際の補助線となる。本書では続けて、古代に「日本人」が存在したと考えるのは歴史の〈遠近法的倒錯〉であること、福沢諭吉はなぜ勝海舟を批判し「私情」を肯定したか、現憲法を起草したGHQ民政局次長ケーディスの深慮、現代資本主義社会の光と闇を対等に踏まえた視点に立つべきことが論じられる。こうして浮き彫りとなるのは、われわれのあいだに、新しい公共性をいかに立ち上げるかという課題だ。

加藤氏の議論は、果敢かつ挑戦的である。戦後という特殊な空間で通用してきた言説の多くから、効力を奪い、退場を迫る勢いがある。そのため、戦後知識人の流れをくむ人びとや、ポストモダン派、新保守主義のグループから反対の声があがった。

評者に言わせれば、加藤氏の言論こそ「普通の言論」で、勝負は明らかだが、論争そのものはなお続いている。本書は『敗戦後論』とともに、日本の文学史・思想史の画期をなす書物として記憶されることになろう。（岩波書店・一、九〇〇円）

東京工業大学教授 橋爪大三郎



（かとう・のりひろ）一九四八年山形県生まれ。東大文学部卒。現在、明治学院大教授。文芸評論家。著書に『アメリカの影』、『敗戦後論』などがある。

1999-32

『一冊の本』 4月号 第4巻第4号通巻37号 pp.9 朝日新聞社 1999.4.1発行

◉橋爪大三郎

『太平洋戦争の起源』
入江昭著／篠原初枝訳／東京大学出版会

大日本帝国が、非合理な戦争に突入するにいたった経過の合理的な説明。ハーバードで日本の近現代史を講じる入江教授は、めまぐるしく変動する国際情勢と、日本の意思決定メカニズム（特に軍部の動向）とに焦点をあてて、大東亜戦争が必然的に生じたメカニズムを再構成している。著者の基本認識は、戦前の日本が第一次世界大戦後の国際社会の枠組み（ワシントン体制）の性格を理解せず、意図しないままに、満州や中国への侵攻によってその体制から孤立し、敵対者に変貌していったということ。科学的・合理的な事実認識をともなわない行動が、いかに危険であるかの警告の書である。

（東京工業大学・大学院社会理工学研究科教授）

『出版ニュース』 通巻1857号 pp.36
出版ニュース社 2000.1.1

橋爪大三郎
◉社会学

昨年9月から今年6月まで、ハーバード大学に滞在中。この間、懸案の書物を数冊、完成させる予定。昨年12月には、『選択・責任・連帯の教育改革 完全版』を岩波書店から出すことができた。この調子で、プレ近代日本思想史など、新しいテーマにも徐々に取り組みたい。

『出版ニュース』通巻1823号 pp.28-29
出版ニュース社 1999.1.1発行

橋爪大三郎
◉社会学

社会経済生産性本部の、教育改革プランづくりを継続し、昨年の中間報告を最終報告にまとめる。『ポスト戦後の正統論』を書き下ろす。

そのほか懸案となっている持ち込みの企画を、なるべく沢山形にする。

MY OWN Y2K PROBLEM

Why have 2000 years passed already?

Daisaburo Hashizume

Counting years with AD or BC, the origin of which is set at the birthyear of Jesus Christ, is surely a calender for the Christians. Nevertheless, Japanese people are making a fuss about the coming of year 2000 and a new century.

The real Y2K problem, if there is any, would be the question of why so many years as 2000 have past since the ascention of Jesus Christ when he promised us that he would come back again before long.

Currently I am in Boston and partially for the purpose of training my English I attend a Sunday Bible desciple course held in a nearby church. I found the course very interesting because there I could learn much about the way the Christians view things. Last week a desciple asked a question on why Jesus Christ doesn't come back though we are waiting and waiting for him so eagerly for such a long time. Most of the desiples are housewives in their 30s taking care of small children at home. The longer we wait for Jesus, the greater the joy there will be when he finally comes, was the answer of the paster, which sounded half sardonical and half solemn to me.

Waiting for GODO is a masterpiece written by Samuel Beckett that describes the state of being tired of waiting for God (or GODO) in vain as an absurdity play. If God doesn't appear, the people on the stage will get bored. As they were not allowed to make a gold bull-calf, they started a game called the capitalism. Aren't modern times a killing of time in order to deceive the absence of God? Then why is it necessary for non-Western people to join their game?

Jewish people observe the Jewish calender, Islamic people also have their own. Japanese people invented their Imperial era starting from the first emperor Jimmu, but threw it away unawaredly.

Translation from Japanese "Naze 2000 nen mo keika shite shimattanoka?" in Litteraire ed. 1999 Guide of the most recommendable books 2000:14-15. Metalogue

12/Dec/1999

おまけ『ファム・ポリティク』通巻223号 p.19 政策を提言する女性の会
1999.3.25 発行

本紹介

「選択・責任・連帯の教育改革」岩波ブクレット No.471

堤清二・橋爪大三郎

社会経済生産性本部の「教育改革に関する中間報告書」の内容のほとんどと、堤清二・橋爪大三郎両氏の対談を集録したもの。報告書起草の精神的背景を知るために最適のブックレットとして、「選択・責任・連帯の教育改革」の原文を手に入れたい方におすすめしたい。

対談の中で橋爪氏は、「現在の学校は監獄にそっくりです」と指摘、校長も教員も生徒も、いつも自分からは見えない誰かに見られているのではとおびえている。それは入学試験だったり、文部省の通達や指導要領だったり。改革案は「自分がもう一度学校に行くのであれば、こんな学校だったら行きたい」と思えるものをつくったと語る。

両氏の提言する改革の基本姿勢と目的は「学校の機能回復、教育機能の回復」であるが、それが実現したらどんなにすばらしいだろうと思わずにはいられない一冊である。

『学問の鉄人が送る14歳と17歳のBOOKガイド』 pp.24
株式会社メディアファクトリー 1999.1.11発行

橋爪　大三郎
東京工業大 大学院社会理工学研究科

はしづめ　だいさぶろう●社会学にとどまらず、戦後の丸山真男に匹敵する社会科学理論の構築をめざす。文化社会学としては仏教の言語戦略、性愛論など。社会問題全般に関しても多くの発言を行う。その思想は正統モダニズムを指向。

専門領域の魅力を伝える一冊

構造人類学

クロード・レヴィ=ストロース
みすず書房

産業革命以来の西欧近代（マルクス主義を含めて）は、「人間はだんだん進歩する」と信じてきた。この信念だけを拡大すれば、第三世界の人々に対する差別と帝国主義を帰結する。著者はそれに対して、人類学者として植民地を調査する中から、人間は最初から知的に優れた存在だった（進歩はなく、同じことの繰り返し）と主張する。21世紀の地球を生きる、基本認識を与える書物だ。

私の大好きな一冊
若い人たちに薦めたい一冊

ベケットの小説や戯曲が好きだ。『ワット』（白水社）は、洋書店で原書を手に入れ、勘能した（しかも安い）。ちなみに英語は、中学校のレヴェルで読みやすく、駄洒落や冗談で埋まっているなぜか悲しい本。

『正論』 八月号 通巻324号 pp.358-359 産経新聞社 1999.8.1発行

日本の救世

司馬遼太郎著

弓社社・1,700円

これら御所は、遠く近代初頭のイギリスの政治思想に発している。そしてその対立は、明治日本の政治にも、また遠く幾多を経としている。イギリスーアメリカ型の対立軸とからんでいるが、政治潮流の対立軸としてみるべきである。

今戦争終わり、保守／革新の対立は過去のものになった。しかしだから、どういう図式によって政治の世界を考えられるのか、誰もはっきりメージできないでいる。

副島氏はこれに、大胆で新しい構図を提示する。それは、現代アメリカを染め分けている巨大な政治思想の潮流である。伝統保守派（ニーキャーン）、現実保守派（ロッキード）、現代リベラル派（人権派）、急進リベラル派（ベトナム・ロハス派（グローバリスト）、ネオ・コンバス（グローバリスト）。この六大潮流を陰まえた世界覇権国家アメリカの思考パターンを負うとしたら。

戦後政治は、どこから出発した。その対立軸は、石橋、岸、田中、中曽根、小沢、鳩山、石橋、大平、宮沢、竹下、田、池田、佐藤、大平、宮沢、竹下、田、細川、羽田、村山、橋本、小泉、と続く政人派・対・吉田派に分かれて、真っ手を握るの対立はもうわかりやすく、一大政党制が自社の国対政治だった。

界内部の抗争だった。国会ゲキャスティ・ポートを握る社会党を抱き込んだ側が、政権につく保守／革新の対立はもうわかりやすく、真っ手を握るの地位を歩むことにしたら。このあたりの分析は、片岡鉄哉氏の『まらは吉田茂』に多くを負うという。

戦後政治は、どこから出発した。その対立軸は、石橋、岸、田中、中曽根、小沢、鳩山、石橋、大平、宮沢、竹下、田、池田、佐藤、大平、宮沢、竹下、田、細川、羽田、村山、橋本、小泉、と続く政人派・対・吉田派と官僚派（吉田学校）の、保守政

戦後の保守／革新の図式を破壊

氏の断言は、「はしがき」で、大体も激越である。そのため、品の悪さ暴露ものと思う読者もいるかもしれない。だがお本書には、多くの真実を洞察が散りばめられている。そして政治を、人脈や人間関係ではなく、思想によって営むものではないからこそ、呼びかけがこめられている。本書を軽くみるとが、やがてじっくり返しを度ってあるこの。

東京工業大学教授　橋爪大三郎

『進研ニュースVIEW21』 9月号 pp.42-43 ベネッセコーポレーション 1999.9.16発行

VIEW LIBRARY

高校生のための名書講読ゼミ

3

ゼミ担当教官

橋爪大三郎

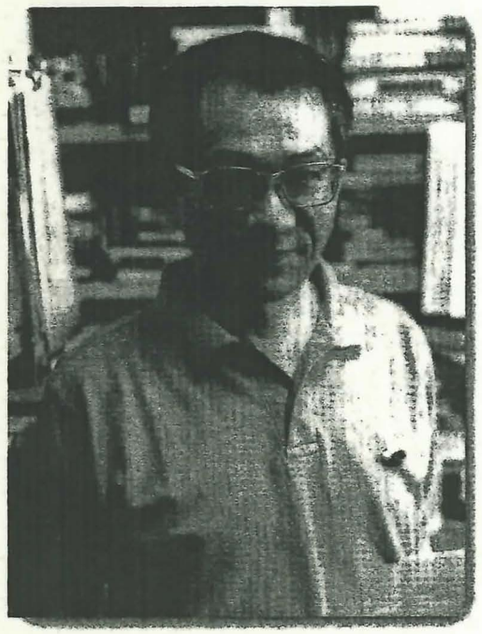
東京工大大学院社会理工学研究科教授

Daisaburo Hashizume

子どもの頃の読書の思い出と言っても、特にこれにのめり込んだとか、これで人生が変わったというようなものはあまりないなあ。ただ、上に兄や姉が4人もいたから、家の本棚にはたくさんの本があって、それを結構読みましたね。まあ、読んだと言っても、大部分はお下がりの本でしょう。戦前、戦中の物がほとんどだから、周りの友達とは話が合わなかったですね。

大体、私は本を読むことで何か楽しみや喜びを見いだすというより、ただ暇だから本を読んでいたと言った方が正確です。小学校のとき、繰り返し読んだのが、親に買ってもらった百科事典なんだけど、これも別に知らないことを調べるためとかではなく、ただひたすら「あ」から読み始めて、「ん」まで読む。終わったらまた最初に戻るという読み方。小学校の一時期、兵庫県の山の中に住んでいたことがあって、その頃は暗くなるまで外で遊び回ってたけど、東京に来てからは、山もないから外で遊ぶこともなくなった。だから、百科事典は暇つぶしになったんです。

中学生になっても乱読の癖はなかなか直らなかった。「暇があれば読む。飽きたからやめる」その繰り返し。『SFマガジン』の山を創刊号から1冊ずつ読み、2年分読んだところで、全部同じだってことに気付いてやめたりね。そう、この頃は、獅子文六の作品もよく読んだ。獅子文六の作品には、お茶の水辺りのホームレスやバーのママとか、いろんな類型の人間が出てきて、中学生にしてみれば、社会勉強的な面白さがあった。それに、獅子文六の作品は実にナンセンスなんだよね。ナンセンスなものというのは私の好きなジャンルなんです。今でもそうですが、私は理屈っぽい性格だから、時にはこういうものを読んで自分を解放したいわけ。もっとも、これも文庫本で10冊ほど読んで、飽きたのでやめたけど。



1948年神奈川県生まれ。
東京大文学部卒業。同大大学院博士課程修了。
フリーでの執筆活動などを経て、現職。主な著書に
『言語ゲームと社会理論――ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』
『性愛論』『橋爪大三郎の社会学講義』など。

不思議の国のアリス

ルイス・キャロル著
柳瀬尚紀訳
ちくま文庫・408円（税別）

「ナンセンスかつ楽しい小説です。
英語特有の変わった言い回しや
面白い言い回しが、
5行に1つは出てくるので、
とてもいい勉強になると思います。
こうした言葉の面白さは、
翻訳ではなかなか味わえないので、
是非、英語で読んで欲しいな」

社会学を専門にしたのは、大学の教科書をいろいろのぞいて、それが一番分かりやすくて、自分に向いていると思ったから。元々、この分野には高校生の頃から興味があった。当時の友達に医者の息子が多くてね。医者の息子というのはませてるんだな。家にフロイト全集なんかがあって彼らも読んでるから、フロイト理論についていろいろ講義してくれる。それで私も社会心理学や社会学なんかに興味を持つようになったんです。

ただ、大学でいざ、本格的に社会学に取り組もうというときには困りました。大学生の頃の私はマルクス主義のシンパだったのね。だから読書と言ってもそのほとんどはマルクス主義の本。今考えると大したことないなあという感じだけど、当時は学生運動の真っ盛りでしょう。読んでいないと周りの話についていけなかった。ところが、マルクス主義は社会学という学問を認めていない。そこでそれなりに悩んだり、考えたりしました。そんなこともあって、この頃はマルクス主義にアンチテーゼを提出していた吉本隆明の本もよく読んだな。

結局、マルクス主義には問題があるという結論に至って、今は大学で社会学を教えたり、ものを書いていたりするんですが、私は元々、もの書き気取りで机に向かって「実存的深み」っていうやつにウットリしたりするような学生じゃなかったから、特に大きなきっかけがあって文章を書くようになったわけではないんです。状況に応じて、頼まれたから、書きたいテーマがあるからという感じでやってきた。特に最初の頃は専門的なものが多かったし、そう多くの人が読むようなものでもなかった。

ただ、私は仕事柄、人の文章もよく読むわけ。そうすると、思想や学問を扱った文章ってやっぱり斜に構えてるものが多いんだね。「俺はこんなことも知ってるぞ、お前はこんなことも知らないだろう」とかね。逆に十分分かってないのに言い訳したり、隠したり。余計なものがたくさんくっついているわけです。私はそういう本を読む度にすごく腹が立った。同じ書き手としても余計なものを外せば、もっと親しみやすいものができるはずだって思うようになったんです。

だから、'88年に書いた『はじめての構造主義』という本では、そういう手練手管を一切外して、ものを書くように努めました。これも頼まれたからやった仕事ではあるんだけど、若い人たちに向けて、易しく読めるということをかなり意識してやれたのではないかと思います。

最近の若い人たちはあまり本を読まないなんて批判があります。だけど、本というものが、読めば読むほどお利口になるものだというのは幻想。うまく読まなきゃだめなんだ。だからただ読めばいい、というものでもない。私だって仕事では読むけど、読まなきゃいけない本を読んでるかどうか……。ただ、読まなきゃいけない本かどうかは、読んだ後でしか分からないんですよ。

それでもあえて読書を勧めるなら、自分のこと、自分が考えてきたことを他人が書いていると思って読むとか、あるいは全くの他人のこと、自分とは違う人の考えが書いてあるとか思って読めば楽しい。いろんな読み方をしてみるといいんじゃないかと思いますね。

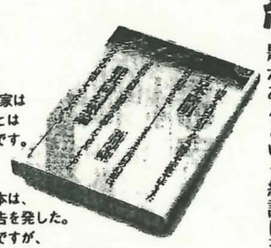
大数学者

小堀憲著
新潮選書・品切れ中

「ガロアとかアベルとか
ガウスなんかの数学者が
どんなに偉くて
どんなに貧乏だったか
ということが書いてある本です。
自然科学系志望の人なんか
こういうのを読んでみるといいと思います。
数学が分かっていればとても楽しいし、
分かってなくても楽しい本です」

改訂新版 共同幻想論

吉本隆明著
角川文庫ソフィア・540円（税別）



「日本民俗学を下敷きにしながら、国家は
どのように権力を持つかをマルクスとは
違ったやり方で思考実験している本です。
階級闘争をなくすために
共産主義革命をしようといった
マルクス主義の主張に対して、この本は、
権力がなくなる保証はないという警告を発した。
私はこれを大学生のときに読んだのですが、
正に書かれるべくして書かれた本だなと思いましたね」

ゴドーを待ちながら

サミュエル・ベケット著・安堂信也、高橋康也訳
白水社・2000円（税別）

「ベケットの作品は大好きでたくさん
読みました。ゴドーというのは神（God）の
ことでしょう。キリスト教の一番の
問題は、世界の終わりと神の再来が
いつになるかということですが、
それが待っても来ない。だから
キリスト教の世界観からすると、
この世は不条理ということになる。
この戯曲、実はキリスト教のパロディなんですね」

はじめての構造主義

橋爪大三郎著
講談社現代新書・660円（税別）

「この本が出たのは、ちょうど
ポスト構造主義というのが
流行りだした頃で、構造主義はもう
廃れていた。でもそれは、何か
おかしい。流行ってるから自分も
やってみるというのも別に悪いことじゃ
ないけど、なるべくそうじゃないようにって
いう思いで書いた本がこれです。
高校生にも読み易い内容になっています」

ねじ式

つげ義春著
小学館文庫・581円（税別）

「私が大学1年か2年のときに
漫画雑誌『ガロ』に発表されて
ずいぶん評判になった作品。
漫画っていうのは
漫画でしかないんだけど、
それでもいろんなことができる。
文学も政治も描くことができるんです。
つまり、人間は何を
武器にしてもいいんですね」

※ご紹介した本（『大数学者』を除く）を1冊ずつ進呈します。巻末葉書にご希望の本の書名を書いてご応募ください。当選者の発表は、発送をもってかえさせていただきます。

『ことし読む本いち押しガイド2000』
pp.14-15,256 メタローグ 1999.12.1

Daisaburo Hashizume

橋爪大三郎

思考のルーティンを抜け出して

単行本ベスト3

『可能性としての戦後以後』
加藤典洋/岩波書店

『国家と戦争』
小林よしのり+福田和也+佐伯啓思+西部邁/飛鳥新社

『コッチェビの叫び 秘密カメラがのぞいた北朝鮮』
安哲兄弟/李英和+RENK訳/ザ・マサダ

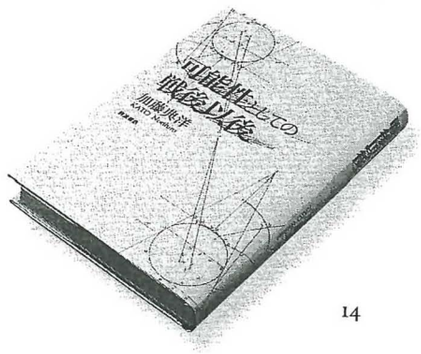
文庫本ベスト

『日本の無思想』
加藤典洋/平凡社新書

『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち』
副島隆彦/講談社+α文庫

歴史論争が、今年も続いている。保守はいまや時代の流れであり、小林よしのり氏が連載中の『新ゴーマニズム宣言』で嘆いているように、保守を気取ることがファッションにさえなっているほどだ。『国家と戦争』は、そうした流れを背景としたタイムリーな企画だが、浮ついた軽さが顔をのぞかせている点が残念だ。

加藤典洋氏の『可能性としての戦後以後』は、昨年の『敗戦後論』につぐ力作評論である。なかでも出色なのは、「失言と癒（べし）見」であろう。戦後の日本人が、伝統的な思考法だと信じているタテマエ／ホンネの二分法が、実は戦後も七十年代以降に成立したものであること。そしてそれが、敗戦による屈伏と価値観の崩壊を忘却するための欺瞞の装置であることを、みごとに論証していく。戦後という思考のルーティンを抜け出そうとする強固な意志が、読者に希望を感じさせる。



私の2000年問題

なぜ2000年も経過してしまったのか

西暦は、イエス・キリストの生誕を基準にしているから、キリスト教徒の暦法である。しかしそんなことはおかまいなく、日本人は2000年だ、21世紀だと騒いでいる。

2000年問題とは、とりもなおさず、イエス・キリストはじきに再臨すると約束しながら、なぜ2000年も経過してしまったのか、という問題のはずである。

私はいまボストンで、英語の勉強もかね、近所の教会の日曜バイブル・クラスに参加しているのだが、キリスト教徒の発想がわかってとても面白い。先日のクラスでは、主である神のことをこんなに私たちは待ち望んでいるのに、なぜ主はやってこないのか、と信者のひとりが質問した。参加者の大半は、小さな子どもを育てている30代の主婦たちだ。牧師は、「待つ時間が長いほど、喜びも大きいでしょう」と、冗談とも本気ともつかない答えをする。

ベケットの戯曲『ゴドーを待ちながら』は、神がやってこない人びとの待ちくたびれた状態を、不条理として描き出した名作だ。神がやってこなければ、人びとは退屈する。黄金の牛を祀るわけにはいかないから、資本主義というゲームを始めた。近代は、神の不在をまぎらわすための戲れではないのか。それなら、非西欧世界の人びとは、なんでそれに付き合う必要があろう。

ユダヤ教徒はユダヤ暦、イスラム教徒はイスラム暦を守っている。日本人はせっかく、神武以来の皇紀を発明したのに、もうどこかにやってしまった。

『コッチェビの叫び』は、北朝鮮に再潜入した密出国者がビデオ撮影した、自由市場の記録。身よりのない浮浪児（コッチェビ）たちが、食べ物を求めてあたりをうろつく様が痛々しい。アメリカの安全保障機関が最近、二十一世紀初頭に世界でもっとも危険なのは日・中・朝の三角形に囲まれた地域であると報告したというが、この国からはしばらく目が離せない。

文庫版が出た副島隆彦氏の『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち』は、類書がなかったのが不思議なほどの本だ。たまたま私は、十ケ月の予定でハーバード大学に客員研究員として滞在しているが、この国で出会う知識人たちは、日本とタイプがまるで違っている。いちばんの違いは、アメリカという国家〜文明のあり方と直結したかたちで、ものを考え、仕事をしていること。こういう現実感覚は、見習うべきであると思う。

（社会学）

橋爪大三郎
1948年神奈川生まれ。社会学。主な著書に『言語ゲームと社会理論』（勁草書房）、『民主主義は最高の政治制度である』（現代書館）、『性愛論』（岩波書店）、『橋爪大三郎の社会学講義』（夏目書房）など。

『「買ってはいけない」は買ってはいけない』　pp.58-59　夏目書房　1999.10.1

「聖なる分離」の儀式

東京工業大学教授（社会学）　橋爪大三郎

『買ってはいけない』という本は、その名の通り、これこれの商品は有害だから買わないように、というメッセージの本である。有害なのは、主成分が毒物であったり、添加物が人体によくない作用を及ぼしたりするからだという。このメッセージが広く受け入れられ、またたく間に百万部を越す売れ行きとなった。

ほんとうにそれらの商品が有害であるかどうか？　これは、科学的に検証するしかない問題である。検証は、専門家に任せるとしよう。私は、その代わりに、「買ってはいけない」というメッセージが何を意味するか、考えてみる。

§

このメッセージは、商品を、二つのグループ（買ってもよい／買ってはいけない）に分ける。商品は人びとの選択の対象である。そこで人びとの行為（選択）も、二つのグループ（してもよい／してはいけない）に分けられることになる。いわば、倫理的・規範的な意味をもつ二分法である。

はて、このような二分法は、どこか覚えがあると思って考えてみると、それは宗教である。イスラム教やユダヤ教には、多くの食物規制や行為規制がある。信者でなければ許される食物や行為が、食べてはいけない、してはいけない、というかたちで禁止される。もちろんそういう食品は、買わない。

数年前、見学のため、東京・代々木のイスラミックセンターを訪れた。「なぜムスリムはブタ肉を食べないか」といったパンフレットをもらった。読んでみると、ブタは不潔な動物である、寄生虫や食中毒も多い、蛋白質の栄養価にも問題がある。ゆえにアッラーがブタを食べてはいけないと定めたのは、科学的に合理的な根拠がある、などと書いてあった。書かれてあることが、まったく根拠がないとは思わない。しかし問題は、もしもあべこべに、ブタ肉に有利な科学的な根拠が見つかれば、ムスリムはブタ肉を食べるのか、である。科学的な根拠があろうとなかろうと、アッラーの命令だから、ブタ肉は食べない。これこそ、ムスリムであろう。科学的な根拠の有無にかかわらず、ある選択肢を排除する。それが、宗教上の禁制（戒律）というものである。

§

宗教になぞらえて言えば、『買ってはいけない』は、聖典である。「商品規制」を人びとに与え、商品社会にあふれる過剰な選択のなかから、これを買ってはいけない、と救済の指針を与える聖典。人びとは、その指示（戒律）に従うことで、自分は選ばれていると信じることができる。と同時に、複雑だった世界は、よいもの／悪いもの、に整理されてだいぶ単純に見えてくる。そうやって安心できるのが、この本の効用である。

いくつかコメントをつけ加えよう。まず買ってもよい／買ってはいけない、の二分法の与え方である。『買ってはいけない』は、買ってはいけない89の商品を紹介しているだけだ。山崎パンがいけないのなら、伊藤パンはどうなのか。三共の新ルルーA錠がだめなら、ほかの風邪薬はどうなのか。たぶん、買ってはいけない商品はもっと多いだろう。なにを「買ってもいい」のか、頭をはたらかせなくてはいけない。

つぎに、聖典は、選択と行為の基準であるから、権威を必要とする。『買ってはいけない』の場合、その権威は、神でないとしたら、科学だろうか。出版のあと、科学的な根拠があるかどうかが論争になってしまった。どう決着するにせよ、文句なしの科学的な権威、というわけにはいかない。

同じメーカー批判でも、『暮しの手帖』の場合は徹底していた。私は子どものころ、毎号読んでいたので覚えている。洗濯機、掃除機、ベビーカー、……。家電製品を中心に各メーカーの商品を集めて、毎号のように実験する。性能、安全性、価格、デザイン。さまざまな要素が多角的に比較検討され、評価が下される。買ってはいけないと評価される場合でも、厳格な実験データの裏付けがある。なるほどと納得できる。メーカーから文句が出たという話は聞かない。これが、科学的な権威というものだ。

『買ってはいけない』は、実験をしない。よそのデータを孫引きしているだけである。メーカーがマスコミで一方的に商品広告をするのはけしからんというが、一方的な商品批判を商品として流通させている自分たちとどれだけの違いがあるのか。これは、科学ではなくて、政治ではないのか。

§

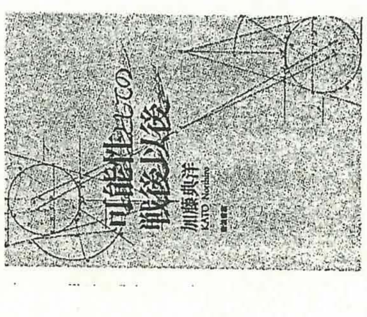
根拠はともかく、「買ってはいけない」ものは買わない。そうすれば、商品と情報に埋もれる消費者の群れのなかで、選ばれた人間として生き残ることができる。『買ってはいけない』という聖典を手に入れ、思いおもいに商品規制をみつけることは、救済の儀式、「聖なる分離」の儀礼なのだ。

それもよかろう。しかし、私に言わせれば、何を「買ってはいけない」か気にする感覚は、いま地球上の人類をとりまく現実とあまりにもかけ離れている。食品添加物の取りすぎで死んでしまった人間が、何人いるだろうか。それ以前に、食品そのものが手に入らないで飢餓線上をさまよっている人びとが、約十億人もいる。

パンをよこせとバスチーユに押しかけた群衆をみて、パンがなければケーキを食べればいいのにともらしたというアントワネット妃を、笑うことはできないのである。

橋爪大三郎

東京工業大学教授



①加藤典洋『可能性としての戦後以後』（岩波書店）

『敗戦後論』で議論をよんだ加藤氏が、関連した論文をまとめた論集。出色なのは、「失言と癋見（べしみ）」。氏はそこで、タテマエ／ホンネの二分法が戦後社会の、それも高度成長期以降に一般的となった用法であることを指摘する。そしてこの二分法が、戦後日本の過去を忘却し、現状のなかに閉塞するための集団的な思考の装置であることを明らかにする。

②副島隆彦『日本の秘密』（弓立社）

アメリカ政治思想界の見取りと、対日本戦略の舞台裏をさぐる。冷戦以後の日本言論界を再構成しようとする、もうひとつの努力。

③灘本昌久『ちびくろサンボよ　すこやかによみがえれ』（径書房）

一〇年前に絶版となった『ちびくろサンボ』は差別本であったか。アメリカの黒人作家や差別運動家に取材し、出版・表現の自由と反差別を両立させる賢明な戦略戦術をさぐる。

Ⓐ山本七平『現人神の創作者たち』（文藝春秋）

この本の読み直しからはじめ、日本の儒学・国学・尊皇思想の系統的な読解と再構成を試みたい。

『週刊　東洋経済』　通巻5577号　pp.67　東洋経済新報社　1999.8.21発行